

第 72 回講演会<2024 年 1 月 22 日開催>

国連平和構築の今—元国連事務総長特別代表にきく

長谷川 祐弘

執筆：シャッジャド円桃（外国語学部 4 年、水野ゼミ所属）

- 講演者……長谷川 祐弘
(元東ティモール国連事務総長特別代表)
- 司 会……水野 孝昭 (本学 IC 学科 教授)
- 共 催……本学 IC 学科



長谷川氏(右)と水野先生(左)

ウクライナ、ガザなど戦乱が続くが、国際平和を担う国連はマヒしている。新冷戦と言われる今、国連の平和構築に何ができるのだろうか。紛争解決の現場で活躍し、国連事務総長特別代表として東ティモール和平を成功させた長谷川祐弘氏が、国連平和構築の意義を語った。

冷戦後の 1992 年に国連の平和維持活動 (PKO) を見直したブトロス＝ガリ事務総長による報告「平和への課題」は、紛争後の「平和構築」という新たな国連の役割を提唱した。その実践が国連カンボジア暫定行政機構 (UNTAC) で、明石康氏が日本人初の国連事務総長特別代表としてトップを担った。国連が「和平合意の維持」にとどまらず、「選挙による新政権の樹立＝平和構築」を目指したのが画期的だった。長谷川氏は国連ボランティア計画 (UNV) 次長として選挙実務を担う 500 人もの国連ボランティアを統括。日本人ボランティアの犠牲を乗り越えて、総選挙を成功させた。

今世紀初の独立国となった東ティモール和平

(02-06 年) では、日本人二人目の国連事務総長特別代表として平和維持部隊が撤収した後の危機に直面した。内戦後の総選挙では、選挙で敗れた側が選挙結果を受け容れずに内戦に逆戻りすることが多い。東ティモールでも、実力者のアルカティリ首相が国家の危機を招いた責任を認めて辞任するかが焦点だった。

「ここで辞めたらすべてを失う」という首相に対して、長谷川氏は「日本では総理大臣を辞めても議員として残り、次の選挙で勝てば政権に復帰できる」と説得した。いま譲歩することで将来の希望が生まれると言葉を尽くした結果、納得した彼は退陣を決意し、内戦再燃をくい止めることができた。実際、アルカティリ氏はその後再び首相に返り咲いた。それは「平和的な政権交代」という民主主義が定着した証 (あかし) にもなった。

「現地の指導者と信頼関係を築いて彼らの心構えを変革することが平和構築のカギである」と長谷川氏は述べた。「負けた側の自尊心を傷つけずに撤退できる道を対話と説得でみつける」。この教訓を、戦争を続ける今の指導者たちにも聞かせたい。「平和構築には指導者が一番の役割を果たす。国連はあくまでサポート役だ」という謙虚な姿勢が印象的だった。



長谷川氏と水野先生を囲んで、
IC 学科長のファン先生 (写真前列右)